

新連載

舞鶴の歴史をたどる

城下町のにぎわい

—江戸時代の竹屋町と大橋界隈—

舞鶴市文化財保護委員 高橋 聡子

天正8年（1580）細川氏が田辺の地に城を築き、城下に町が出来ていきました。しかし、今見るような城下町は1600年に入国した京極氏が城を倍に拡張して68年、その後の牧野氏200年の間に整えられたものです。

城下町は本町・職人町・魚屋町・丹波町・平野町・竹屋町・寺内町・新町・紺屋町・堀上町の地子御免町10町に大内町・引土町・朝代町・引土新町・西町・獵師（吉原）町を加えた16町で形成されていました。町は藩の町奉行監督下ながら自治を任されており、各町に年寄・肝煎・組頭・五人組をおき、その上に城下町全体の責任者として総年寄をおいて運営されていました。各町全体の責任としてはぜ申等の雑税、道普請・御水道掃除・出火駆付等の人足などの町役を負担し、商人や職人は種々な特権を藩から認め保護してもらう見返りに運上金等を納めました。

町方の人数は1668年3872人、1746年5452人（1294軒）、1859年7075人（1725軒）となっています。（ちなみに「百姓」の人数はそれぞれ23222人、32106人、39941人。それに藩士関係者2千数百人、僧・山伏・社人などの宗教関係者4百人余が加わり、幕末には田辺藩人口5万人余というところですよ。）

城下町は高野川によって東西に二分されていますが、町の中ほどに唯一の連絡橋である大橋が架かっています。大橋は長さ20間（約36m）藩内で最も重要な橋であり、京街道・若狭街道・宮津街道・河守街道など諸街道の起点となっていました。ここから一里塚が定められています。橋のたもとには常夜灯や高札場、藩の管理する両替所が置かれ、魚や野菜を売る露店も開かれて、町の人に旅人・行商人など行き交う人びとでにぎわっていました。



田辺大橋界わい(田辺城資料館 模型)

この大橋の東詰めより北に160間（約300m）が竹屋町でした。高野川右岸河口に位置して

交易・商業の中心となり、藩内外の物資を集散し港町として栄え、大商人も多く居住していました。天保5年（1834）の「商売上帳」によると、全戸数139軒の職業は多種多様です。手工業製品生産に従事するものが36軒あるものの、商品販売102軒に「在通い・小船小商ひ」のように近辺の村々を回る行商・仲買を入れるとほとんどが商業に関わっている町といえます。実は商業と製造業を兼業したり、同一店舗で異種類の商品を販売するなど、町の販売商品別延べ商人数305軒中荒物が52軒、魚23軒、米穀物20軒という有様で、いまだ専門店・専門職への分化が進んでいませんでした。

例をあげると

- 一 種桐実油職 米穀物 荒物 質屋職
油屋嘉左衛門
- 一 小間物 太物（麻・綿織物） 瀬戸物
青物 干物 荒物 衣裳類貸物
扇屋市兵衛
- 一 餅 荒物 綿打 在通ひ 肴請売
鮎屋 嘉助

町家はほとんどが平入りの中二階家屋で、間口は2間から3間、奥行きは平均10間。表は店となり、土間があって奥に土蔵がありました。海運の基地となった竹屋町では高野川兩岸に諸物産の保管蔵が軒を連ね、船荷の積卸場・船小屋・船細工所が点在して港町の景観を呈していました。蔵内では酒造・しょう油・味噌などの醸造や油・ろうそくなどの絞り作業なども行われました。

また、竹屋町には藩内の村人たちが城下町にやってきた際、休息する村宿として貸していた商家が多くありました。天保13年の「商売上帳」には143軒中21軒あり、25カ村が利用しています。中でも和泉屋孫右衛門は1軒で大丹生・多祢寺・河部由里・余部下の4カ村を引き受けていました。

田辺城資料館には、本町・竹屋町辺りの町家と大橋界わいの精巧な模型があって、当時の人々の暮らしをそのままに見せてくれています。

（入場料無料）

高野川河口略図(文化6年)舞鶴市史より

